

Finale のフォント

| 入力キー | Decimal | グリフ |
|------|---------|-----------|
| H | 104 | ‡ |
| I | 105 | ˆ |
| J | 106 | ˘ |
| K | 107 | • |
| L | 108 | ˙ |
| M | 109 | ˜ |
| N | 110 | ˚ |
| O | 111 | ◦ |
| P | 112 | <i>p</i> |
| Q | 113 | ‡ |
| R | 114 | ˘ |
| S | 115 | <i>pp</i> |
| T | 116 | ‡ |
| U | 117 | ˘ |
| V | 118 | v |
| W | 119 | ◦ |
| X | 120 | § |
| Y | 121 | v |
| Z | 122 | ≡ |

職人が手作業で楽譜を作っていた頃、符頭や調号などの記号類には、その同一性を得る為の道具が用いられていました。彫版では刻印用のポンチが、我が国では手作りのハンコがそうなのですが、Finale 等の楽譜ソフトはそれに倣って設計されています。五線やスラー等はベクトル描画して、多くの記号類にはフォントとして搭載されたものを用いるものですが、つまりそれらは一般の文字と同じ扱いとなります。左図は私の自作フォントの一つの使用手引き表の一部ですが、例えばこの中の全音符頭を普通の欧文フォントに置き換えると w になります。全音符は英語で Whole note と言いますが、この w を表したもののなのでしょう。

さて、Finale ではテキストや発想記号や歌詞のツールで日本語フォントも扱えるものの、記譜用フォントやアーティキュレーションのアイテムとしては1バイトフォントしか使用できません。1バイトとは8ビット、つまり2の8乗の256が総数ということですが、実際にアプリケーション一般で確実に使えるのは200余りくらいです。基礎的楽譜記号としては十分な数ですが、欧州の全ての文字に対応するには全然足りません。そこで8ビットの手前の7ビット、つまり128までの符号部分に英語の大文字小文字や数字やドット等の文字を固定収納して、残りの後半部分に各種欧文の特異文字を収納したものを何種類か作り、具体的にはユーザーがOSの入力言語モードを切り替えて、それぞれの符号化法に対応するという方法が考案されました。これが西洋フォントの伝統的様式の一つです。どの符号化方式でも前半部分は不変ですから、英語の文字や数字に限っては確実に使えます。この7ビット部分をASCIIとも呼びますが、昔から「ASCIIに文字化けなし」と言われてきたのは以上の理由によるものです。

けれども厄介な事に、この符号化仕様はWinとMac間で異なります。両者間でデータを交換した際に起きる問題の一つがイタリア語のùという文字で、もちろんASCII外ですから化けてしまいます。対処法は用意されていて、プログラムオプションでも選べるのですが、「他のOSの欧文特殊文字のコンバート」を使えば確かにこの問題は解消されます。ただし残念な事に、そうすると今度は楽譜スタイルの日本語名が化けてしまうので、私たち日本語版のユーザーにとっては使い難い機能と言えるでしょう。

| | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 128 | 129 | 130 | 131 | 132 | 133 | 134 | 135 | 136 | 137 | 138 | 139 | 140 | 141 | 142 | 143 |
| Ä | Å | Ç | É | Ñ | Ö | Ü | á | à | â | ä | ã | å | ç | é | è |
| 144 | 145 | 146 | 147 | 148 | 149 | 150 | 151 | 152 | 153 | 154 | 155 | 156 | 157 | 158 | 159 |
| ê | ë | í | ì | î | ï | ñ | ó | ò | ô | ö | õ | ú | ù | û | ü |
| 160 | 161 | 162 | 163 | 164 | 165 | 166 | 167 | 168 | 169 | 170 | 171 | 172 | 173 | 174 | 175 |
| Š | ° | š | Ý | § | ý | Ž | ß | ® | © | ™ | ´ | ¨ | ≠ | 親 | 人 |

上図も自作フォントの一つですが、独自の対処法として作ったもので、大部分の文字は一般的な欧文用です。

「欧文特殊文字」とは違って記譜用フォントはWin/Mac完全互換ですが、そのすべての記号がASCIIというわけではありません。WinにFinaleをインストールするとCドライブ直下にPS Fontsというディレクトリが自動的に作られ、その中に各種記譜用フォントが収納されますが、それらの符号化方式は何とMacのもので。さらに、Mac Symbol Fontsというファイルにはそれらのフォント名が書き込まれていて、これにより、記譜用フォントの互換性が保証されるように、それらを特別扱いするという仕組みです。数年前にフォントを自作することを思い立って、作成ソフトを購入してから既製品数種を詳しく調べ始め、そして以上の事実を発見して驚嘆したものでした。

ならば、ごく普通のテキストフォントを記譜用フォントに倣って作れば、そして同じように組み込めば良いのではないかと考えました。結果は満足すべきもので、全く問題なく日々の制作業務に使っています。

ところで、上記の表には「親」や「人」という漢字も含まれていますが、それらは我が国固有のギタータブ譜用に備えたものです。これらは指使いを示すもので、クラシックギターでは欧文文字または数字がそれぞれに用いられています。楽譜記号に漢字とは仰天ものですが、これが非クラシック系ギタータブ譜のスタイルというものです。その、独自の様式を確立したとも思える日本固有のギタータブ譜について、次回には現実の商業出版での業務経験の数々を元に書いてみる予定です。